銀河通信

№１２９　２００４．９．２５

編集・樋口　みな子

郵便振替 02740-7-56535
銀河通信（6号分1,000円）
E-mail minginga@agate.plala.or.jp

自由の天地の原風景に集う
知里幸恵フォーラム'04in登別

左から金成マツさんの墓 横山孝雄さんの墓 吉田ルイ子さん、横山むつみさん、私、小野有五さん

９月１８日、アイヌ神謡集を一冊残して１９歳で亡くなった知里幸恵から学ぼうとフォーラムが登別で開かれました。主催は知里森舎です。

午前中は、幸恵さんの生まれ育った川や、山をアイヌ語地名で５０人で散策。案内をしたのは知里森舎の横山孝雄さんです参加者で金成マツさんと、知里幸恵さんの墓参りをしました。東京にいた頃、登別を懐かしむ日記や手紙をたくさん残しています。そのひとつが、ヲカチペ川でした。（岡志別川）「私の耳に響いてくる音律はヲカチペ川のサラサラサラサラとのこりくる・・・」の詩そのままにオカチペ川はあり、幸恵さんの望郷の思いに胸が熱くなりました。

今は、姪の横山むつみさん夫婦が暮らす、幸恵さんの生地は、栗や、カラマツの大木が、どっしりと根を下ろしていました。今回の台風で数本のカラマツが倒れていて、風速５０メートルの恐ろしさをここでも思い知らされました。幸恵さんが遊んだ栗の木が今も元気に育っていて、私たちを見守っているかのようでした。

午後からは、フォトジャーナリストの吉田ルイ子さんの講演と、小野有五さんとの対談があり、会場は、登別市民だけでなく、東京、京都、千歳、旭川、白老、札幌など各地から２００人が集いました。姪である横山むつみさんが、アイヌ神謡集の序文を朗読して講演に入りました。

吉田ルイ子さんは、室蘭の出身です。「大正の時代、幸恵さんのマイノリティであるアイヌの女性の生き方が、私自身の生き方にもつながる」と語りはじめ、小学生の頃、ルイ子さんに、心やさしいアイヌの少年がスズランを摘んでくれたエピソードを紹介。アイヌ、アイヌと、いじめにあっていたこと、アイヌの人たち家族の温かさが忘れられない原体験だと語りました。幸恵さんの業績は、金田一京助氏の影に隠れがちだが、もっと評価されていいはず、「私はアイヌだ、どこまでもアイヌだ・・・同じ人間ではないか、私はアイヌであったことを喜ぶ」と日記に残した幸恵さんの生き方を、日本だけでなく世界中に発信すべきだとし、幸恵さんのエコロジカルな見方を物質文明を見直す原点として、知里幸恵を紹介して行きたい、世界のマイノリティな人々、アメリカ、オーストラリア、シベリアの先住民に伝えていきたいと結びました。

小野有五さんとの対談では、写真を始めたきっかけや、どんな写真を撮ってきたかが語られました。水俣病を告発した写真家のユージン・スミスの生命の誕生の瞬間を捉えた一枚の写真のとりこになって、フォトジャーナリストの道を歩むことになったこと、写真を撮るとき、最も大切にするのは被写体との心のコミュニケーションであること、撮られる人がいい写真だなと思う写真を撮りたいと言います。ハーレムなどでの取材では、体が小さかったこと（１５０ｃｍ）、アジア人であったことで安心感を持たれたと語り、小さな体で世界６９カ国を歩いたエネルギーが素晴らしく、感動しました。名前の由来が人類愛のルイと聞き、納得しました。

会場にいらした、中本ムツ子さんのカムイユカラの歌、大須賀るえ子さんのヤイサマも思いがけなく聴くことができ、私たちを魅了しました。　（樋口みな子）

遥かなる美瑛岳 日本山岳会中央分水嶺踏査登山　美瑛岳～十勝岳縦走に参加して

8月28日、白金温泉の「白樺荘」に東京や関東からの会員も含めて17人が参加して、新妻徹支部長が分水嶺踏査の支部の取り組みについての簡単な報告があり、参加者からの山への思いや、ユニークな活動などがひとりひとりから語られ楽しい交流会になりました。

29日、4時起床。晴天です。3つのコースに分かれての登山です。

私は、美瑛岳～十勝岳縦走のコースに入りました。6時10分、望岳台から助田陽一さんをリーダーに9人で出発しました。途中から、当日参加の朝日守さんが合流。

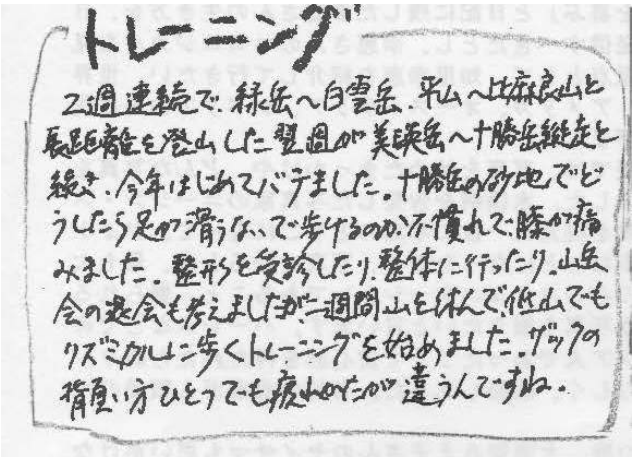
望岳台からは広大な礫地の斜面を、正面に十勝岳を仰ぎながら登ります。1時間で、十勝岳と美瑛岳の分岐でした。やがて雲の平のお花畑が、無味乾燥な砂漠から解放してくれ、シラタマノキ、ガンコウラン、コケモモなどに女性たちから、「指輪に素敵ね」の声が弾み、足取りも少し軽くなりました。メアカンキンバイ、マルバシモツケ、クロウスゴなどが次々に現れます。トラバースが終わり、ポンピ沢へと下ると、エゾコザクラの可憐なピンクが迎えてくれました。夏の名残を精一杯咲いている姿に感動しました。美瑛富士との分岐からは急登をあえぎながら頂上を目指しますが、イワギキョウが私たちを迎えるかのように涼しげに咲いていて励まされました オオバタケシマランの真っ赤な実が風にゆれていました。

風が強く吹き飛ばされそうになりながら必死に足を踏ん張って、高度を上げるにつれて礫地になり、爆裂火口に沿って登ると、頂上でした。十勝岳、オプタテシケ、富良野岳、トムラウシ、そしてニペソツや、石狩岳なども一望できて、頂上で見る壮大なパノラマに感激もひとしおでした。

美瑛岳に別れを告げ、十勝岳を目指しますが、月の砂漠を歩いているような異次元の世界のようでした。ざくざくと砂礫の中を、トラバースしながら進みますが、踏み跡がはっきりせず、ガスがかかっているときは道に迷いそうです。わたしにとって、この十勝岳までの道のりが厳しく長かったです。植被階状土に一面に咲いていたイワギキョウが今も目に焼きついています。よくぞ厳しい自然の中で、美しくけなげに咲いている姿に、この文を書きながらまぶたが熱くなります。分水嶺を歩き、メンバーの数人は鋸岳の頂上も踏みました。

十勝岳手前から、上ホロカメトックコースのメンバーが私たちを出迎えてくれました。十勝岳では3コース18人全員で握手を交わし中央分水嶺踏査登山成功を祝いました。

日高110山を歩いた神原照子さんのさりげない心配り、リーダーの助田陽一さん、サブリーダーの鈴木定信さん、そして足が痛い私の下山に最後までついてくれた八木橋貞美さん、ありがとうございました。



トレーニング

2週連続で、緑岳～白雪岳、平山～比麻良山と長距離を登山した翌週が美瑛岳～十勝岳縦走と続き、今年はじめてバテました。十勝岳の砂地でどうしたら足が滑らないで歩けるのか不慣れで膝が痛みました。整形を受診したり、整体に行ったり、山岳会の遠会も考えましたが二週間山を休んで低山でもクズミカルに歩くトレーニングを始めました。グループの背負い方ひとつでも疲れかたが違うんですね。

高山植物パトロールを終えました

日本山岳会北海道支部は、道の委託を受けて、今年も大雪山系と十勝連峰の高山植物のパトロールを行いました。指定された会員３５人が、それぞれ数人ずつに分かれて参加しましたが、私も３人から１０人のグループで登山しながらパトロールしました。

その時の記録です。

雄大な　大雪を満喫
高原温泉～緑岳～白雲小屋～白雲岳～小泉岳

クモイリンドウ

８月１４日晴天。高原温泉登山口から見通しのよくない急登は、熊除けの鈴を鳴らしがら進みます。

お盆だからか、登山者は１０人足らず。第一お花畑と第二お花畑はミヤマリンドウや、メアカンキンバイ、アキノキリンソウなど夏の花から、秋の花へと変わりつつありました。

緑岳までガレ場が最大の難所。日光をさえぎる木が一本もないガレ場は足を踏み外さないように慎重に登りました。山頂からは、旭岳やトムラウシ、東大雪のニペソツや、ユニ石狩岳なども見渡せ素晴らしい眺望でした。すぐに白雲小屋に向かいました。

サブザックに詰めなおし、白雲岳と、小泉岳に。クレーターのような広い台地が印象的。晴れているときはなんでもないが、ガスがかかったらどこを歩いているのか見失ってしまいそうです。

高山植物の季節は終わっていましたが、イワギキョウが群落で、涼しげに咲いていました。白雲小屋周辺には、クモイリンドウ、ユキバヒゴタイなど。白雲岳からの眺望も素晴らしく雄大な大雪を満喫しました。

長い、長い、登山の疲れも吹き飛ぶほどの充実感を味わいました。

白雲岳頂上で

表大雪の大展望が広がる
平山～比麻良山

ウスユキトウヒレン

ヨツバシオガマ

８月２１日、某山の会に混ぜてもらい、白滝村の山の家に宿泊。２２日天気が心配でしたが、なんとか雨にならずにすみそう。

コースは、針葉樹林帯、滝、ハイマツ帯と変化に富んでいて、楽しい。もう夏の高山植物は終わっていましたが、クロウスゴ、クロマメノキ、コケモモの実がたくさんあり、数は少ないけれど、タカネシオガマのピンク、ウメバチソウの白、ハイオトギリの黄などが目を楽しませてくれました。平山は名前のとおり、平な山でしたが、東の間見えたニセイカウシッペや表大雪の山々が見渡せ、嬉しかったです。比麻良山まで登り、引き返し、下山、昼食も含めて６時間でした。

札幌からはかなり遠くて、機会がなければ行けない山でした。大雪の奥座敷で、静かな山で、原始の自然が魅力ですが、高山植物の盗掘の跡もありました。保護するためのロープも必要になるかもしれません。高山植物のたくさん咲いている時期に再度登ってみたい山です。

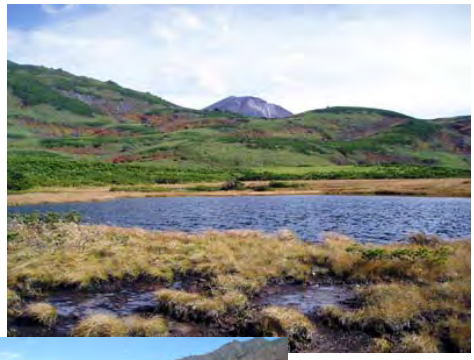
平山の頂上で

紅葉に沼の平が映えて

松仙園～沼ノ平

９月２０日、快晴。愛山渓登山口を８時４５分から長靴で登り始めました。ほとんどの登山者が永山岳に登るコースに行きますが、私たちは沢にそって歩き、時には笹薮をかき分けながら進みます。深いぬかるみに足をとられたりしましたが、膝までの長靴だから平気です。２時間で松仙園へ。湿原にポッカリ池塘が美しい。

さらに沼ノ平に向かいました。今年は台風で葉が散ってしまったせいか、紅葉が例年よりくすんでいましたが、紅葉をバックに水をなみなみと湛えた沼ノ平が、大雪山系に囲まれたのびやかな風景に、しばし至福の時間を過ごしました。アイヌ神謡集の序文の一節、「紅葉の秋は野分に穂揃うすすきをかきわけて、宵まで鮭とるかがりも消え谷間に友呼ぶ鹿の音を外に、円かなる月に夢を結ぶ。嗚呼何という楽しい生活でしょう。・・・・」を思い出しながら。



旭岳が雄大です

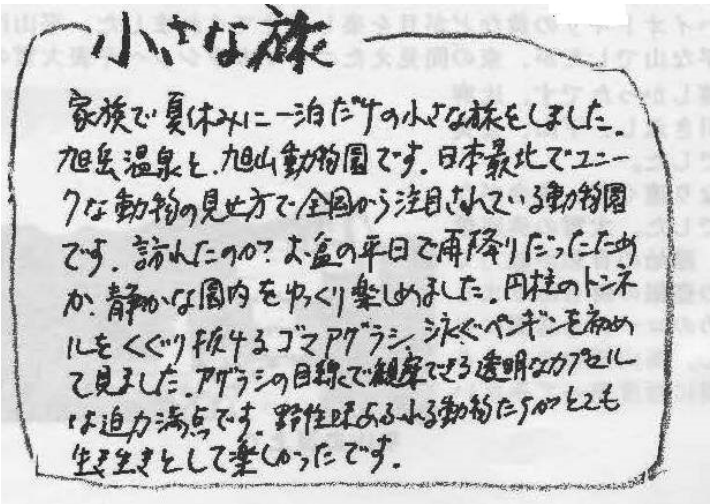
静かな雨竜沼湿原

雨竜沼湿原～南署寒別

９月２３日、野幌森林公園を散歩でもしようと思っていましたが、好天に誘われて近所の方と雨竜に向かいました。登山口に向かう林道には累々と、白樺の倒木が続き、台風で吹き荒れた風速５０メートルがどんなにすごいものか、まざまざと見せつけられ、折り重なるように倒れた時の木の悲鳴が聴こえるようでした。

雨竜沼湿原には、登山口から１時間１０分でした夏の雨竜沼は人、人で行きかうのも大変ですが、出会ったのは３組だけでした。湿原は東西４キロ、南北２キロも、のびやかに広がり大自然を心ゆくまで楽しめました。

その足で南署寒別岳まで登りました。目の前に大きな山塊、署寒別岳、増毛の山々が素晴らしかったです。



小さな旅

家族で夏休みに一泊だけの小さな旅をしました。旭岳温泉と、旭山動物園です。日本最北でユニークな動物の見せ方で全国から注目されている動物園です。訪れたのが、お盆の平日で雨降りだったためか、静かな園内をゆっくり楽しめました。円柱のトンネルをくぐり抜けるゴマアザラシ、泳ぐペンギンを初めて見ました。アザラシの目線で観察できる透明なカプセルは迫力満点です。野性味あふれる動物たちがとても生き生きとして楽しかったです。

『きもちは、言葉をさがしている』

―― 二〇年目の紅茶の時間

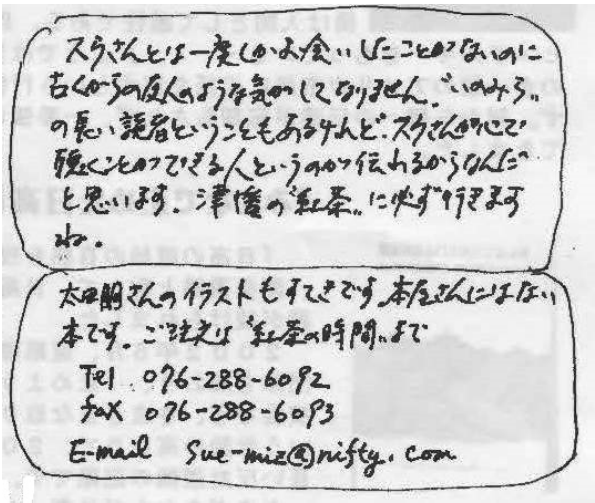
水野スウ＆中西万依著

「紅茶の時間」１５００円

水野スウさんがオープンハウス「紅茶の時間」を始めて２０年。紅茶の歩みを綴った「まわれ、かざぐるま」「出逢いのタペストリー」に続く３冊目の本です。スウさんの義姉の死をきっかけに書き残したいと、自分の育った家族のこと、亡き母に代わって育ててくれた義姉のこと、義姉の不思議家族との絆や、スウさんが夫や娘と育んできた家族のことなどが、温かい文章でつづられ、血のつながり以上の深い絆だった義姉との交流に、何度も目頭が熱くなりました。家族っていいなあ。私は、夫や、息子の話を深く聴いたことがあったかなあと恥ずかしくなりました。「紅茶（略します）につどう私をふくむ一人ひとりの気持の内側を聴こうとして耳をすまし、そこから学んだことを分けあいたくて書いた」本から、つらい時はつらいって言える場が、私の近くにもあったらいいなと思いました。私は、職場ではいつも元気で明るい人に思われ、愚痴って言ったことがなかったのです。涙は布団の中でした。

娘の万依さんの文章も正直な気持がストント胸に落ちました。万依さんは「スウさんの娘」であることで、いい子を演じつづけなければならなかった苦しさを率直に明かしていて、私も息子の気持よりも「この本がいいよ、こうしたらいいよ」と押し付けていたなと思い当たることがありました。いい子をやめた万依さんは、彼女が赤ちゃんの時からあった紅茶がもうひとつの家族だったことに気づくのです。「いろんな人に出逢い、人と人が関わることがなんてあったかくていとおしいものなんだろう、紅茶はお世辞を言ったり、謙遜したりする場じゃない。だからこそ、私は人を信じるってことができたし、本当に感じた事を言葉にすることができたんだろうな」と書いています。

多くの人と関わる紅茶を主宰しながら若い日のスウさんは、ひとと一緒に何かをするのが苦手、困ったことや悩み事があっても相談できなかったと知り、私と似ているなあと思わず苦笑しました。私にもただただ祈る日々がありました。「祈りは掌と掌とハグだった」の表現がすてきです。


スウさんとは一度しか会いしたことがないのに古くからの友人のような気がしてなりません。"いのみち"の長い読者ということもあるけんど、スウさんが心で強くこんとのできる人というのが伝わるからなんだと思います。津幡の"紅茶"に必ず行きますね。

太田朗さんのイラストもすてきです。本屋さんにはない本です。ご注文は"紅茶の時間"まで
Tel 076-288-6092
fax 076-288-6093
E-mail Sue-miz@nifty.com

『家族狩り』

第１部　幻世の祈り～第５部　まだ遠い光

天童荒太著　新潮文庫　各５００円～７００円

９６年に山本周五郎賞を受けた「家族狩り」の完全な改定版です。

物語は家族を皆殺しにする事件をきっかけに、さまざまな家族が登場します。家庭内暴力を振るう子どもが両親を殺害し、自殺するというパターンでした。刑事、馬見原は警察の家庭内暴力の激化と判断したことに疑問を覚え、たったひとりの部下とコツコツと捜査を進めて行きます。馬見原自身も息子がオートバイで自殺同然の死をとげて以来、妻は心を病み、娘も非行に走りと家族崩壊の危機に直面しています。登場人物は、それぞれに家族関係の葛藤で心が傷ついた人ばかり。彼らが、それぞれの世界観、人生観、家族観を語り、その痛みが、わがことのように胸に迫ります。「永遠の仔」も名作でしたが、「家族狩り」はさらに深めて、家族否定から肯定に変化していて、感動しました。生きることに不器用だけど、誠実であろうとする群像に共感しました。家族の絆を取り戻す終末まで少しも飽きさせず、一気に読ませる筆力に圧倒されました。ひさしぶりに読み応えのある小説でした。

『明日へひようひょ　重度障害者のムスメともに生きて

森田登代子著　向陽書房　１５００円

２５年前、森田さんは重い障害を持った娘かずよさんを産みました。突き刺すような他人の視線や、「こんな子を産んで」の心ない言葉に傷つき、娘の死を願った日のことまで率直につづっています。かずよさんの生命力に突き動かされるように、森田さんが変わっていく姿がすてきです。ムスメは、普通小学校に入学しますが母の知らないところでいじめに遭っていました。そのことが一番残念です。クラスの児童にとってもかずよさんがいることで、学べることはたくさんあったはずなのにと思いました。

母とムスメは、運命共同体だけど、一心同体ではないという、程よい距離感がムスメを自立させているのでしょうか。俳優を志す、かずよさんの生き生きと輝く瞳が何よりも「生まれてきてよかったわ」のことばに象徴されています。障害者の悲しみや苦しみを１００パーセント理解できなくても、共感し、互いに支えあうことはできるのだと改めて思いました。

『敗北からの創作』　明川哲也著　幻冬舎　1500円

ドリアン助川の名前で「叫ぶ詩人の会」を結成。ラジオや新聞で人生相談などで活躍していましたが、２０００年にバンドを解散してニューヨークに行き、そこで目撃したのが９・１１の爆破テロでした。

暴力化するアメリカと追従する日本に敗北感が募った著者は、この数年間苦しみつつ、ひとりの人間として、何かを創り出さなくてはと探り続けたプロセスの記録です。著者のデモも署名もたいした力にはならないとする意見には賛成しかねるけれど、「デモをする自分たちは正しくて、頭が良くて、それを規制しようとする公僕は人間として感性である。自由や反戦を叫びながら、しかし心の中にはちゃんとヒエラルキーをもっている・・・。」ようでは意味がないというのもよくわかります。たどり着いたのが一般のアメリカ市民に手紙を出すという行動です。住所と名前はインターネットで検索するのです。個から個への伝達が忘却もされず、一番強いのだと提案する著者の平和への真摯な思いが伝わってきました。

『みんなで止めた日高横断道路』　報告編集委員会　５００

「日高の原始の自然を残そう」と横断道路に反対する運動が始まりましたが、開発道路と称して、日高山脈中央部を貫く形で、１８年間にわたって道路建設が続けられました。

２００２年５月、道路建設中止を目的に、自然保護団体や山岳団体や、労働団体も加わり、「止めよう日高横断道路全国連絡会」を結成。署名活動や、講演会など、さまざまな取り組みが行われ、自然保護からも無駄な公共事業だという世論の高まりで、２００３年８月に中止が決定しました。２０年にわたる長い反対運動の記録です。

さまざまな人が日高への熱い思いを語っていて貴重な資料になっています。

連絡は　今野平支郎さんへ　ＴＥＬ・ＦＡＸ　０１１－７６５－７７７５

『ひとり旅は楽し』　池内紀著　中公新書　７２０円

独身時代、仕事を終えて夜行列車に乗って終点の網走で降り、バスを乗り継いで、霧多布の茫漠たる雪原を歩いた日が目に浮かびます。誰にも頼らず、たったひとりで、しっかり立っている自分を確認できた旅でした。

何でもない旅が著者の目を通すと味わい深くなるから不思議です。そらんじたくなるような美しい文章に旅への思いをかきたてられました。序文からとてもいいのです。「ひとり旅は、ほんとうにひとりの旅だろうか。ひとりになると、とたんに想像のなかにいろんな人がやってこないか。最初の恋人とも、二十年前に死んだ友人とも自由に会える。話ができる。ひとり旅ほどにぎやかな旅はない。」

疲れにくい歩き方や、良い宿をみつけるコツから「海辺は冬がいい」や「湯のつかりかた」や「ひとり登山」など体験的なたびのコツが楽しく、私も一緒に旅しているような気分を味わいました。

映画『パピヨンの贈りもの』

仏　フィリップ・ミュイル監督

幻の蝶を探す旅

８歳のエルザと、同じアパートに住むひとり暮らしの老人、ジュリアンが幻の蝶を探す旅に。主人公のふたりは愛情に飢えています。ジュリアンは失われた愛に、少女エルザは、かまってくれない母の愛に。

イザベルという変わった名前を持つ蝶を探して、山に向かいます。その南仏の山々の自然が美しく、子どもにとっては厳しい登山の中で心通わすシーンが、とても詩情あふれてよかったです。イザベルは亡き息子が会いたがっていた蝶であることが明かされます。

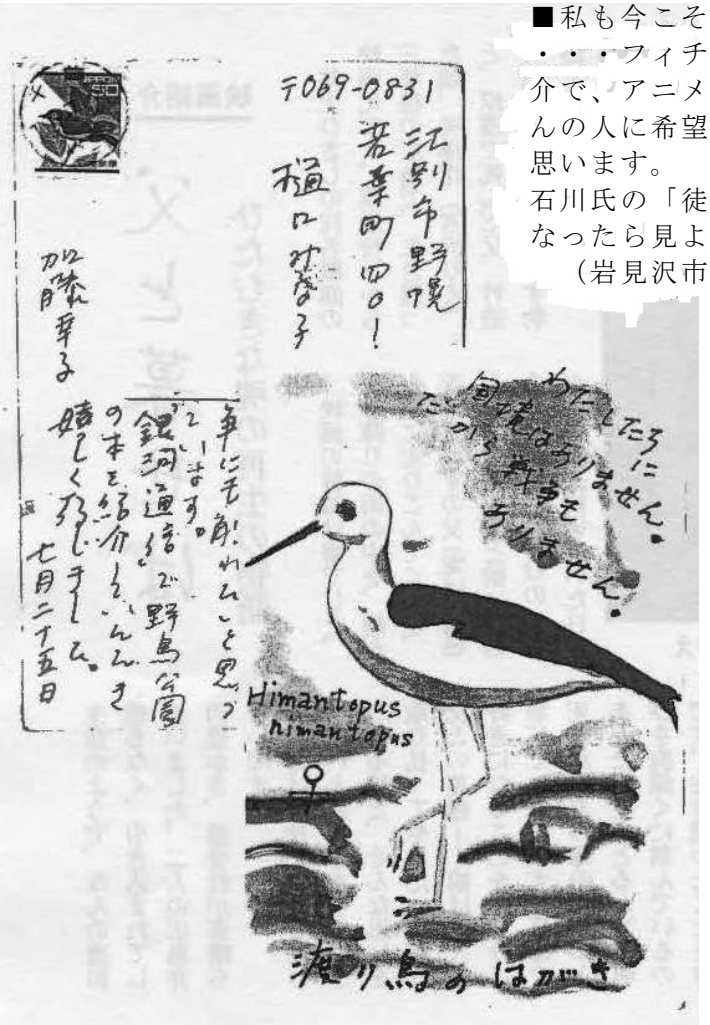
さなぎから蝶に羽化したラストが感動的。お年よりから、子どもへ、生命の不思議さ、力強さをバトンタッチしていく映画でもありました。ジュリアンを演じたミシェル・セローが、人生の深さを見せて秀逸。

購読料をありがとう　２００４・７・２７～９・２５

相馬　淑子（江別市）　高野　ケイ（札幌市）　中川　悦子（札幌市）　千葉　朋代（札幌市）
山影　静子（夕張市）　東　直美　（札幌市）　菅沼　宏之（札幌市）　大久保フヨ（北広島市）
さかい　広　（札幌市）　向田晶子（札幌市）

１２号分、カンパも含めて１７０００円は印刷、送料に使わせていただきます。ありがとうございます。切手のカンパもありました。

お便り



■私も今こそチャンスと５月、夫とネパールの旅をしました。・・・フィチンさんは、むつみさんのご主人、横山孝雄氏のご紹介で、アニメ、ビデオになった案内を頂き喜んでいます。たくさんの人に希望と元気の出るアニメを見てもらえたらステキだなと思います。
石川氏の「徒歩の旅」も読みたいし、「白いカラス」はビデオになったら見ようかな・・と銀河でいろいろ刺激を受けています。
（岩見沢市・Ｓさん）

■台風がひどかったですね。北大のポプラ並木も無残としかいいようがなく、自然の驚異を思わされました。・・・ひとりひとりは、平和な日本にあって安心と思っているのかもしれませんが知らないうちに忍び寄ってくるものの怖さを感じます（札幌市・Ｋさん）

■この山の中の生活、野生動物との共生を余儀なくされています。春早くにテンが我が家に下宿、夜中に暴れるものがいるので、スワ強盗と身構えました。茶の間のテーブルのサラダまでさらってゆくのです。姿を見せない不気味な生き物、日中はカサとも音をさせないで夜半に暴れまわるのです。強力なネズミ捕りペッタンコを敷きつめました。懐中電灯に照らし出されたのは見たこともないやつ。鋭い歯で火箸にかみつきます。毛布で押さえ込み御用となりました。猟師に見てもらい、テンとわかりました。メンコイ顔立ちながら凄く獰猛なのです。蛇、すずめ蜂。まあこの山中、彼らのすみかに人間が入り込んできたのですから、非難されるのは私どもかもしれませんね。（夕張市・Ｙさん）

■やっと水俣に行くことができました。今回の水俣には、水俣展に関わった北海道の方がお二人参加されていました。ボランティアさんが７００人も参加したのですってね。すごいです。（水海道市・Ｍさん）

■銀河通信１６周年おめでとうございます。元気の素になる野性味たっぷりの自然を運んで下さる通信を楽しみにしております。私も某誌に新刊ブックガイドを交替で連載することになりましたが、大変なものだと知りました。（札幌市・Ｎさん）

■地域で子育て支援″てくてくの会″を週一回やってます。０歳児から３歳児１４名母親１２名が通ってきます。私はＳ３６年に保母の資格を取得し、退職して初めて保母の仕事をしているのです。今は小さい子どもたちに元気をもらって過ごしています。森林浴ではなく赤ちゃん浴かな。それと風俗営業をやめさせるために住民訴訟を考えています。ラブホテルに制服の高校生が出入りしているのを３回ほど目撃されています。それなのにどうして平気でいられるのでしょう、無関心な大人に腹がたちます。地域の反対署名も集めています。見逃す大人であってはいけないのです。（北広島市・Ｏさん）

■いつも新鮮な情報をありがとうございます。賢治の集いのコピーをお届けします。９月に北海道高齢者大会で発表、豊平川ウオーキングやさまざまなことに参加してます。夏の２４日間毎朝ラジオ体操した効果ありで体力は５０代でした。（札幌市・Ｓさん）

アイヌ民族からのメッセージ

道新文化講座を春から受講しています。中本ムツ子さんのカムイユカラ、大坂愛子さんのヤイサマを直に聴けて感動しました。詳細な生活記録を書き残した砂沢クラさんの孫である付志子さんのお話も良かったです。10月からまた違う切り口で講座が始まります。是非ご一緒に学びませんか？ ㊙

あとがき

今号の発行も遅れました。日曜は山に登っている日が多くなかなか書けませんでした。ここしばらくは、読書や芸術を楽しむ静かな秋を楽しみたいと思います。山以外の会合などに出かけることが多く、夫から「みなちゃんは何でも受けなくてもいいんじゃないの？」と言われます。努力！？悪筆ですが、書きも少しだけ改善しました。㊙